

私たちの手で世界を PEACE に

—立命館附属校戦後70年企画—

はじめに

立命館附属校では、学園の教学理念である「平和と民主主義」を具現化する教育を目指している。生徒主体の自主自立を尊重する取り組みの中で、平和への強い思いと行動力をつけてもらいたいと願っている。

戦後70年の年にあたり、生徒達が過去を学び、将来の平和を創造できる人へと成長するための絶好の機会であると考え、様々な取り組みを実施してきた。

各附属校の生徒達が集まり、今年の取り組みへの思いをコンセプト・フレーズとして、

「私たちの手で、世界をPEACEに」

という言葉にし、すべての取り組みに共通の思いを込めてきた。同時に生徒達によって、下のようなロゴマークを定めて活用した。



画像1 統一ロゴマーク

「立命館附属校平和宣言」を作成する取り組みを中心に、多くの取り組みが行われた。ここでは、「立命館附属校平和宣言」作成のための生徒達の活動、立命館宇治中学校・高等学校（以下、立命館宇治）で取り組んだ「日韓交換授業&ホームステイ」の取り組みを紹介し、さらに、各校で取り組んだ戦後70年企画をま

立命館附属校平和教育研究会

執筆者代表 杉浦 真理（立命館宇治中学校・高等学校）

とめることで、未来への平和の願いを確かなものにし
たいと考える。

（立命館一貫教育部 田中博）

1 立命館附属校平和宣言作成の取り組み

2014年10月、立命館宇治社会科教諭森口等の問題提起から、この企画の萌芽が始まった。彼は、1985年に戦後50年企画を立命館宇治発足直後に実施し成功させていた。この取り組みは、立命館学園挙げて取り組まれた一貫のものであった。社会科教科会での議論後、この課題は管理職西川教頭（現副校長）の下、立命館宇治の年間方針に取り入れられてゆく。また、同時に岩崎副校長（現一貫教育部長）により学園の課題に働きかけられる予定であった。この課題を全附属校の課題として取り上げるように、2015年3月に開かれた立命館国際平和ミュージアム附属校専門委員による立命館附属校平和教育研究会に立命館宇治から問題提起された。附属校全体で取り組むことが確認され、一貫教育部田中博に引き取られ企画化されていった。

内容は、

- (1) 統一のロゴマークの選定
- (2) 夏の学習合宿の実施
- (3) 附属校協議の平和宣言の作成

という企画となった。

(1) 統一のロゴマーク

2015年6月立命館附属校生徒「戦後70年企画」実行委員会第1回委員会が、立命館中学・高等学校（以下、立命館中高）で開かれ、各校から、生徒と教員が参加した。ここでは、これからの実行委員会企画の中身、とりわけ、コンセプトフレーズとロゴの選定や「立命館附属校生徒平和宣言」の起草について話し合われた。7月10日の第2回委員会で、コンセプトフレーズとロゴマークの選定が行われた。

コンセプトフレーズは、「私たちの手で、世界をPEACEに」になった。それは、戦後70年の平和宣言

につながった。また、ロゴマークが制定され、この附属校戦後70年企画で、各校共通に使われた。このロゴマークは立命館宇治提案のものである。

(2) 夏の学習合宿の実施

また、前述の立命館附属校生徒「戦後70年企画」実行委員会第1回委員会で立命館中高の生徒会執行部より夏休みの合同合宿の提案がなされた。

8月4日、5日の1泊2日で、立命館国際平和ミュージアムとBKC（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）で行われた。

8月4日は、ミュージアムを会場とした平和のための京都の戦争展およびミュージアム常設展の見学と、カセム館長のお話、戦争体験者の体験談を聞き、戦争への幅広い理解とその体験の継承の大切さ、とりわけ、戦争体験を最後に聞ける世代が今の高校生であることを参加生徒は再認識した。4日夕刻、BKCに移動して、生徒どうしてミュージアム見学の振り返りを行った。翌5日、午前中エポック21にて、戦後70年の平和宣言に向けて、また、附属校共通の課題に取り組む意義、

2015年という日本と世界の現状について、立命館宇治教諭杉浦真理が短時間、映像も交えて問題提起をした。さらに、今後の取り組みについて生徒たちだけで議論をした。

(3) 附属校協議の平和宣言の作成

立命館中高「90/50企画」平和宣言も参考にし、この宣言起草の作業が始まった。

10月2日、14日、23日、28日、11月11日の放課後、TV会議が5回行われた。このような短期間で濃密な会議は、立命館附属校初の取り組みであろう。また、各校が分担する章についても、校内での議論もあり、このTV会議以外にも、SNSを使った会議も多数もたれ、多くの議論が飛び交った。このような濃密な議論を経て、「私たちの手で、世界をPEACEに」が作成されたのである。これに関わった生徒たちの活躍に賛辞を送りたい。また、多くの労力を割いて関わった附属校全体の先生方にも感謝したいと考える。

(立命館宇治 杉浦真理)

「私たちの手で、世界を PEACE に」

～立命館附属中高「戦後70年」平和宣言

これは、私たち立命館附属校生徒による戦後70年企画のコンセプトフレーズである。

PEACEとは、平和。世界を平和にするそのほんの一翼を、私たちも担いたいという想いからこのフレーズは生まれた。

平和という言葉は、書籍、報道、演説など世界中の至る所で用いられている。すなわち、私たちが世界が平和であってほしいと願うように、世界中のたくさんの人々が世界平和を願ってきたということだ。

しかし、考えてみてほしい。人々が口にする平和、それは本当に皆同じ「平和」なのだろうか。もし、それぞれで意味が違うのなら、本当の「平和」とは一体何なのだろうか。

私たちが考える「平和」それは、暴力がなく、人権が認められ、生活が脅かされない状態の事だ。私たちはこれを「積極的平和」と呼ぶ。世界がこの積極的平和になるのを目指すにあたって、私たちはここに「知ろうとする」「相互理解」「未来志向」の3つの柱を建てる。

この3つの柱を立命館附属校生で共有し、想いを一つにし、皆で一丸となって「平和」に向かっていきたい。そのために、3つの柱のそれぞれについて言及していこうと思う。

戦後70年を迎えた今、私たちは「戦争」という過去を振り返る必要がある。しかし、「戦争」を振り返ると言っても、今の私たちに

は持っている知識を振りかえり反省することしかできない。真に「戦争」を振り返るためには、教科書では学べない「戦争」の実態を知ることが必要である。この方法はただひとつ、戦争体験者の方に話を伺うことである。戦後70年という年は戦争体験者の人数が減少し、同時にお話を伺える機会が減っていくことを指す年でもある。私たちは、今というこの機会を逃してはならない。更には、戦争体験談を私たちなりに受け止め、後世に繋いでいくことも重要ではないだろうか。



そして、これから社会に出ていく学生の私たちは、「過去」について知ることが必要である。それは、出来事の解釈には多様な観点が必要だということを知ることである。そのためには、ただ「過去」に何が起こったのかを知るだけではなく、理解することが必要である。しかし「現代」の社会に生きる私たちにとって、戦争体験談などを筆頭に「過去」を身近に感じる機会が、著しく減少している。今の私たちに必要なのは「自発的に行動し、知ること」である。これから平和の担い手として生きていく私たちは、この力を培っていきたい。

過去を知り、多くの事を学んだ私たち立命館学園は、学園としての理念や使命を広く社会に発信するための立命館憲章を現在制定している。その憲章の中に次のような一節がある。「広く内外の協力と支援を得て私立総合学園への道を歩んできた。」という文章だ。

学園だけではなく、私たち生徒も内外の協力と支援のおかげで様々な事を成し遂げている。その一例として、附属4校全てで実施されている海外研修が挙げられる。海外研修では異なる価値観を持った人々と交流し、互いに理解し合う事を継続して行っている。

私たちが必要だと掲げる「相互理解」は、平和へ繋がる一つの行動になると考えられる。相手を理解する事で初めて相手に対する思いやりの心が生まれ、それにより双方でなんらかの解決に近づく事が可能だろう。また理解し合った関係になれば、それを保つための努力をする事も出来る。

また今日では海外研修に限らず、SNS等で世界中と繋がり交流することも容易になっている。

私たち立命館の生徒にとって「相互理解」は、一地球市民として世界を良い方向に進めるために出来る、身近で且つ有効な行動ではないだろうか。

立命館学園名誉総長の末川博氏の「未来を信じ未来に生きる」という言葉を、立命館の生徒なら誰でも知っているだろう。この言葉には不戦の誓いと平和と民主主義の二つの意味が込められている。相互理解をすること、過去を知りこれから先、その過去を伝えていくことは同じ過ちを繰り返さないために今の私たちにできることである。そして恒久の平和を願うこと、世界に目を向け自分たちで行動することが10年先、20年先世界に羽ばたく立命館生として必要である。

今年から選挙権が18歳以上に改定され、私たち若い世代からでも政治に参加し、主権者としてその意思を政治に反映することができるようになった。大切なのは自分の意思を持ち、そして意思表示する行動力である。前述した柱を順守し、一人一人が行動する意志を持てば世界は必ず平和になる。

4校の全生徒がこの宣言文を胸に刻み、そして平和な世界を創るために一人一人が意思を持ち、未来に向けて今、行動していくことをここに宣言する。

2015年12月8日

アジア・太平洋戦争開戦74年目の日にあたり

2 各附属校の取り組み

(1) 立命館中学校・高等学校

日本で戦後70年を迎える今年、ヨーロッパでは第1次世界大戦から100年を迎え、さまざまな記念行事が開催された。本校では、スーパーグローバルハイスクール (SGH) 事業の一環として、交流のあるフランスのInstitut de Genechから招待を受け、国際平和に関する高校生会議に出席をし、12か国の高校生がともに戦跡を訪ね、当時に思いをはせ、平和について考える「第1次世界大戦遺産会議」(World War I Heritage Conference) に参加し、日本では触れることのない当時の情勢やヨーロッパ各国の動き・戦争に参加した人々の反省と後悔を知るとともに、平和を希求する気

持ちを共有した。

SGHフランス研修

World War I Heritage Conference (WW I Heritage Conference) に参加

11月8日(日)～11月14日(土)、本校の生徒7名が、フランスで開催された、高校生によるWorld War I Heritage Conferenceに参加した。この会議は、第1次世界大戦から100年を経たヨーロッパで、特に当時の激戦地であったリール近郊で、世界中から高校生を集め、その記憶をとどめ次代に語り継いでいこうという取り組みである。Institut de Genechという学校が主催し会場となっており、5つの国の代表団 (Delegates) と個人参加の留学生 (Exchange Students) をあわせ

て、最終的には12か国からの高校生が集い開催された。

代表団 (Delegates) として参加した学校は、ポーランド、スロベニア、ベルギー、それに、アジアからはインドのAmity Schoolと日本からの本校のみであった。

各国からのプレゼンテーションでは、日本には第1次世界大戦の遺跡と考えられるものはあまりなく、事前の準備の段階でも苦労したが、本校の生徒達はそこは工夫をして、日露戦争から第2次世界大戦参戦への流れ、また、それ以降の平和憲法の誕生から現在の情勢などをまとめて語った。ヨーロッパとは違う視点での平和を希求する流れの説明に、参加者はみんな聞き入ってくれた。インドのプレゼンテーションでは、インドにもCommonwealthsの一員として第1次世界大戦に参加した兵士がおり、その説明や、ヨーロッパ各国からは当時の様子と現在の独立に至るまでの経緯などが発表され、厳しい現実のなかにも各国がその現実に向き合い平和を希求する、島国の日本とは少し違う感覚の思いや現実を知ることができた。

期間中、参加者全員でリール郊外にあるAustralian World War One Memorial of Fromelles や Canadian World War One Memorial of Vimy等へも訪れた。第1次世界大戦にCommonwealthsの一員としてオーストラリアやカナダから派遣された兵士の墓地で、多くの犠牲者が出た場所でもあり、記念館には当時の激戦の様子や派遣されて戦死した若い兵士のそれぞれの背景や家庭状況など説明があった。当時の様子・若くして亡くなった兵士の状況に思いをはせ、全員が神妙に聞いた。

11月11日(水)、この日は第1次世界大戦の終戦を記念する日で、この地方でもPont-à-Marcqで市長や各界の代表者が参加して盛大な記念式典が開催された。我々も全員がこの式典に参加し、平和への思いを深めた。特に、今回の会議に参加した各国の代表から「平和への誓い」をそれぞれの国の言葉で語る場面があり、その様子は地元のメディアにも取り上げられ、終戦100周年を記念した式典に日本も参加したことに対し大いに感謝をいただいた。

11月12日(木)は、パリでの1日研修を行った。リールからパリへはバスで5時間程度かかり、パリに到着したのはお昼前であった。フランスの国会議事堂の見学後、徒歩でコンコルド広場やシャンゼリゼ通りを訪れた。公園でのランチの後、ルーブル美術館にいった。ルーブル美術館見学の後は、ルーブル美術館北側の若者が集うオペラ座周辺を散策し、夜になりライト

アップされたエッフェル塔を見ながらバスでリールに戻った。

この翌日の夜、我々が散策していた地域で悲惨なテロ事件が起きた。帰国してからそれを知り、このような平和を希求する高校生の国際会議の趣旨とは裏腹な現実に呆然とするとともに、単純には考えられないその現実をかみしめ、同時に、さらに平和を求める気持ちを強くした。

本校では、以前から、中学2年での沖縄研修をはじめ、さまざまな取り組みを展開してきているが、戦後70年にあたり、昨年度よりスタートした「貧困の撲滅と災害の防止～平和な社会の実現に貢献する人を育てる～」をテーマとした取り組みをさらにグローバルに展開したいと考えている。

(立命館中高 竹中宏文)

(2) 立命館宇治中学校・高等学校

2014年10月、本校社会科教諭森口等の問題提起からこの企画が始まった。戦後70年に、「平和と民主主義」を教学の柱とする立命館学園全体で附属校を揚げて取り組むことの大切さが、社会科教科会議で確認された。さらに、管理職を通じて学園全体に呼びけることが確認された。

本校では、2015年度の学校年間方針に位置づけられ、「戦後70年企画」実行委員会が組織され、西川副校長ならびに社会科のイニシアチブで、学内戦後70年企画が立案され実行された。

様々な授業、生徒参加のイベントが構想されたが、具体的な動きは社会科教員のリードで実施されたと言ってよい。生徒組織としては、代議委員会が有志としてこの企画の実施に協力し、とりわけ、戦後70年の平和宣言の起草に活躍することになる。

6月3日には、被爆者の花垣ルミ氏を招いた講演(被爆70年)によって、戦後70年企画のオープニングを飾った。

政治経済・グローバルシティズンシップの授業では、私たちの平和宣言を書く実践が課題に出された。図書館には、戦後70年のコーナーが設置された。

7月31日から8月6日は、第14回東アジア歴史キャンプが開かれ、参加した本校生徒によって上海市民に聞き取り、アンケート活動が行われた。また、戦争展に本校生徒が参加し、附属校の企画委員会として生徒合宿に参加した。

8月には本校の中学校生徒会が広島に行き広島平和

記念集会の式典に招待参加、8月6日の登校日に企画が組まれた。

9月25日・26日の学園祭である興風祭りで、東アジア歴史キャンプメンバーが戦後70年の内容を展示した。また中学1年は、戦後70年を意識した企画「モザイクアート」が取り組まれた。

10月本校教諭大八木賢治による日韓近代史の講演会が放課後開かれ、朴先生（ザミル高校教員、韓国側の授業のホスト）が来校し、日韓基本条約の内容や日韓基本条約50年の歴史を、日韓交流授業フィールドワーク参加生徒へ講義していただいた。

10月31日～11月3日、日韓交流授業フィールドワークが実現し、ソウルにて高校生はホームステイをしながら市内アンケート調査、日韓基本条約についての考え方、日韓の平和な未来のためについての意見交換を行った。

11月21日～12月4日、立命館国際平和ミュージアムにて、立命館附属校平和教育展示があり、この間の戦後70年企画も合わせて成果を示した。

12月13日、「全国高校生戦後70年「未来」プロジェクト」において、東京の集会で附属校平和宣言を配布し、全国に附属校の取り組みを示した。さらに、12月15日の映画鑑賞で、被爆体験に関わる「夕風の街、桜の国」を全校で鑑賞した。

2学期終業式では、以下の感想を寄せた生徒たちにより、平和宣言の朗読確認、日韓交流授業フィールドワークの様子が全校生徒に発表されて、この企画は終了した。

この企画を附属校全校で実施できたことは、立命館宇治校の歴史の中でも特筆すべきものであり、活動に参加した教員、生徒たちに謝意を送る。

（立命館宇治 杉浦真理）

「立命館宇治高等学校では附属校4校での活動に加えて、立命館宇治での活動を行いました。2015年は第二次世界大戦後70年という年に加えて、日韓国交正常化という日韓の2国にとってもとても重要な年でした。そして私たちは10月末から11月にかけて韓国研修を実施しました。韓国研修ではフィールドワークやホームステイ、学校訪問に加えて韓国の方々に対して日韓関係に関する街頭アンケートを行いました。

フィールドワークで特に印象に残っているのは西大門刑務所でした。この刑務所には日本が戦争時に韓国の方々に対して行った残酷な歴史がありました。これらの非人道的な記録を私は日本の歴史教科書では見た

ことがありませんでした。改めて歴史というのは教科書に載っているものがすべてではないのだと感じました。教科書では学べない事実を自主的に学んでいくことの大切さを実感しました。

また韓国研修で一番印象に残っていることは、これは私たちの実施した街頭アンケートを見ても明らかなのですが、アンケートに答えてくださった大半の人は日本に悪印象を持っていました。これはメディアの影響が大きいのだと思います。これからの本当の日韓関係の改善のためには私はマスメディアだけに頼らないことが一番大切なのではないかなと感じました。」

（立命館宇治生徒

日韓学校交流フィールドワーク団長 平松時生）

「僕たちは、これまで戦後70年企画として活動を続けてきました。戦後70年の節目に、平和と民主主義を教学理念に掲げる立命館こそ行動を起こさなければならないという思いからです。しかし、年が明け、今は戦後71年目に入りました。それでも、まだ僕たち戦後70年企画の活動は終わっていません。なぜなら、僕たちのこの戦後70年での学びを、いつまでも忘れずに、後世へ伝え、未来へと投射することが僕たちの最も重要な役目だからです。そのために、僕たちの思いを平和宣言文に詰め込みました。これからの課題は、この僕たちの学びや思いを、多くの人にわかってもらうことだと思います。しかし、残念ながら、この立命館宇治高等学校の生徒の中でも、僕たちの思いを分かってくれているのは一部であると感じています。

平和は決して勝手には生まれません。僕たちが努力して生み出すものです。平和の上に胡座をかいていると、いつか平和は奪い去られるという考えを持つのは、物心ついた時から平和が当たり前僕たちには難しいかもしれません。真の意味で僕たちの思いを分かってもらうためには、僕たちがそうしたように、皆に自分で気づいてもらうことが重要なのだと思います。

（立命館宇治生徒

附属校宣言文起草メンバー 和歌すがお）

（3）立命館慶祥中学校・高等学校

北の立命館を舞台に、戦後70年にあたる2015年度に実施した各学年の取り組みを以下に紹介する。

中1：「平和をテーマにした学校祭展示づくり」

例年、中1は教室企画として、装飾と巨大モザイクアートづくりに挑戦してきた。今年は、戦後70年を意

識し、学年フロアのテーマを「戦争と平和を考える」に設定した。学年常任委員会でどのような空間を作るか議論を重ねた。議論の結果、来場者に時系列的に戦争と平和について考えてもらいたいという想いから、1組が「戦前の世界」、2組が「戦中の世界」、3組が「戦後の世界」、4組が「現代」、5組が「未来」について展示を製作することになった。展示の様子については、例えば1組が戦前の原爆ドームの姿を立体製作で表現することに挑戦した。その過程で、当時の色彩を再現するために、北海道被爆者協会に取材に出かけ、戦前の広島を知る被爆者の方にインタビューを行うなど、学校を飛び出し、地域で学ぶ姿が見られたことは大きな意義だと感じる。また、これにあわせて、朝日新聞社主催の「全国平和短歌コンクール」に学年応募し、入選賞と奨励賞にそれぞれ1名が選ばれ、飛騨高山市で行われた表彰式に参加した。

中2：「平和を表現するバルサタワーづくり」



画像2 生徒が製作したバルサタワー

美術の授業で、バルサ材を利用した作品制作を行った。「平和」の2文字をテーマとして与えられるのみで、デザインの構想や色彩の決定などは、生徒に任された。作品制作もさることながら、構想段階で、仲間と意見を交わしたり自分なりに調べたりすることが重要になる。優秀作品の1部は、年末に立命館大学国際平和ミュージアムの立命館附属校平和教育実践展示でも展示した。

中2：「総合学習 地域と戦争レポート」

総合学習の授業で、戦後70年を意識した取り組みを行った。身近な地域の戦時中の姿について調査し、レポートを作成する取り組みである。調査の結果、普段登下校の際にスクールバスの発着地となっているJR新札幌駅周辺が、戦中に陸軍の弾薬庫が置かれていたことや、冬にスキーを楽しむ手稲山が、軍需にされた手稲鉾山であって、朝鮮半島から強制連行があったことを知るなどした。今回の調査で、北海道に空襲があった事実にはじめて気がついた生徒もあり、70年前の

出来事を自分ごとに感じられる取り組みになった。

高1：「有志による夏休み広島訪問団」

高校1学年の有志による夏の広島訪問が実現した。京都への立命館大学キャンパスツアーのオプションとして実施されたもので、生徒や保護者が中心になって学校側に働きかけ、広島訪問が実現した。参加者たちは、広島で感じたこと学んだことをフォトエッセイにまとめ、平和の尊さを改めて感じただけではなく、戦争をとりまく「戦前」「戦中」「戦後」の歴史の継承者として若者が果たす役割について、決意をあらたにした生徒が多かったことがフォトエッセイからうかがえた。



画像3 生徒が製作したフォトエッセイ

高3：「SGH認定校として」

2015年から文部科学省により、「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」に認定されることになった。初年度は、主に高校3学年を舞台に、国際平和に貢献できるグローバル人材の育成に向けたプロジェクトがスタートしており、70年の節目の年にこのような認定を受け、よりダイナミックな教育展開が可能になったことは本校にとって嬉しいニュースだった。タイやカナダを舞台にしたフィールドワークや、青函地域でのボーダーツーリズム学習、アイヌ文化を学ぶ道東合宿や、アイヌアートプロジェクトの結城幸司氏を講師にむかえて行った集中講義など、戦後70年から先の未来に貢献できる人材育成プロジェクトは、その一歩を力強く踏み出している。

(立命館慶祥 山口太一)

(4) 立命館守山中学校・高等学校

1、目的

グローバル化や情報化が進展する21世紀の現状を見据え、人権・共生・環境・非暴力・多文化などを含む

ガルトゥングスタイルの「包括的平和教育」という広い視点を意識し学習する。

日本の平和教育の伝統である戦争について教える平和教育実践との関連の下で、平和な社会形成や建設に貢献できる人物の育成を目指す。

2、目標

1) 知識

- ①日本の戦争体験を加害・被害両面から理解する。
(被爆関係DVD 2本)
- ②地域における戦争の歴史を理解する。
(パンプキン爆弾・滋賀県平和祈念館)
- ③差別や貧困・格差のない「積極的平和」「構造的暴力」の視点から平和問題を理解する。
(平和学講座 本校教員担当)
- ④地球的な平和諸問題を理解し、それらの関連性を総合的に考察する。
- ⑤平和問題を克服するための世界的な努力と試みと、日本の役割を理解する。

2) 技能

- ①主体的に資料を収集し、調査できる。
調べ学習（『長崎平和新聞』の作成：中2）
- ②平和の問題を批判的に分析できる。
- ③調べたことを整理表現し、広く発信することができる。
発表（事前学習・文化祭・NZ研修・SSH発表会・作文コンテスト）
- ④周囲と共感的に平和的に接することができる。

3) 態度

- ①自分を見つめ、他社を尊重し、世界の多元性を受容する。
(中2 APU・中3 NZ・高校海外研修)
- ②暴力の被害者に共感し平和の問題を自分に引き寄せる。
- ③歴史的・国際的視野で平和問題への興味関心を持つ。
- ④異なる人々と友好的に生きようとする。
(中2 APU・中3 NZ・高校海外研修)
- ⑤勇気と希望をもって平和な社会形成のために協力しようとする。

3、取り組み内容

【中学】

総合土曜活用の1つとして平和と民主主義の学園の教学理念に基づき「平和学習」を実施する。

- 1) 創立記念LHR「立命科」での
“平和と民主主義”講座。(※中高共通)
- 2) 中2 APU長崎平和研修（2泊3日）
- 3) 中3 NZ海外研修（18日間）
- 4) 文化祭展示 平和のメッセージを伝える。
『長崎平和新聞』『竹灯籠』
本校のICT教育の一環として『プロジェクションマッピング』の手法を用いた平和展示。
- 5) 立命館国際平和ミュージアム附属校展示。
- 6) 中3 NZ研修での現地プレゼンテーション。

【高校】

- 1) 海外研修 FS高1 ベトナム研修
AM高2 6コース（バンコクNGO）
- 2) 高3 国際協力（学校設置科目）
「自分たちのできる国際協力」
企業との連携でフィリピンの貧困問題解決の提案
「ココヤシを材料とするリップクリームのフェアトレード」
京都新聞・NHK等マスコミ取材多数：

【中学・高1 課題】

「JICA中学生・高校生エッセイコンテスト」

入賞

高1年5組 辻涼香 「国際協力特別賞」

高1年3組 田井中波紀

「関西国際センター所長賞」

高1年4組 岩下穂乃花 「佳作」

中1年1組 山田和樹 「佳作」

中2年5組 中村翼

「滋賀県青年海外協力協会会長賞」

(立命館守山 箭内健)

3 民主的主権者の育成をめざす平和教育の成果と展望～日韓交換授業&ホームステイの取り組みより

(1) はじめに

戦後70年の諸企画のまとめとして、2015年11月に本校で取り組んだ「日韓交換授業&ホームステイ」の取り組みは、大きな成果を収めることが出来た。この取り組みから学んだ成果と展望をまとめたい。

(2) 取り組みの背景と内容

自明のことだが、「グローバル化は欧米化を意味するものではない」のである。「英語を話せること」がグローバル化への対応の「目的」であるかのような誤解や、TOEFLのスコアを伸ばすことが英語教育であ

るような誤解が、少なくない生徒に存在している。それらは「手段」であるはずだが、「目的」となっている現状を危惧している。また、「外国人とは欧米人のみを指す」風潮も存在している。しかし、本校では以前から東アジアとの関係や交流、学習を重視してきた。全学をあげて取り組まれた学園の戦後50年企画では、阪神淡路大震災で被災された神戸の在日韓国人への聴き取り調査を民団の協力を得て実施した。その成果を踏まえ、生徒が韓国を訪問して戦後50年に関する韓国市民への聴き取り調査を行い、それらを冊子にまとめて刊行して、大きな成果を残した。夏休みには東アジア（日中韓）青少年歴史体験キャンプに10年以上にわたり多くの生徒を派遣し、本校の生徒がその成功に多大な貢献をしてきた。それらの経緯を踏まえ、韓国の東北アジア歴史財団の招請事業として、3年前から韓国の蚕一高校との間で交換授業を行ってきた。韓国の教師が本校を訪問して授業を行い、本校の社会科教師が韓国を訪問して授業を行ってきた。今回の取り組みは、その交換授業の内容を更に発展させ、生徒のホームステイや生徒による交換授業、博物館などを中心にしたフィールドワーク、そして戦後70年に関する聞き取りを韓国市民に対して行った。戦後50年当時の状況と現在で大きく異なる点は「戦争が出来る国」になった安保関連法制（戦争法）の制定と平行し、ヘイトスピーチに代表される「嫌韓」と称される排外主義的風潮が世間の一部に見られる。また、18才選挙権が実現し高校生が主権者になったことである。今回の取り組みは、平和の危機と排外主義的な歴史の逆流に抗して、18才で主権者となる日本の高校生と韓国的高校生がともに学び、語り、交流を深めることで、歴史の歯車をささやかでも前進させることが出来たと確信している。

（3）取り組みの成果

4日間の韓国での経験は、生徒たちに大きな刺激と学びをもたらした。その成果は大きく分けて次の2点に集約される。

（3）- 1 東アジアでの日本を客観視し、相対化できたこと～市民への聴き取り調査の結果から

高校生の政治意識の低さに関しては、本校もその例外ではない。「総選挙」といえば、AKB48のそれであるとの認識もあるし、「新聞をほとんど読まない」一方で、LINEのための携帯電話を手放せないことは、日常的な風景になっている。

しかし、「海外に出る」ことは、必然的に日本を客観視することが迫られる。加えて、街頭などで「日本政府と国民への印象」に加え、「安保法制（戦争法）、日韓関係、安倍総理への評価」などへの聴き取り調査を行うことで、必然的に生徒たち（在日韓国人生徒も含む）は、「韓国社会から見た日本」を客観視し、相対化することが出来た。街頭での聴き取り調査の結果、「日本政府と国民への印象」に関しては、「約9割の人が何らかの日本に対する悪印象を持つ一方、9割以上の人は日本国民には好印象を持っていること」が判明した。生徒たちはその理由を「近年では、K-popやJ-popなど韓国文化や日本文化が互いの国に浸透しており、政治的問題はまだ残っているが、お互いに好印象を持つ人が増えてきているのではないかと分析している。この結果からも、今回の韓国訪問の意義がより鮮明になった。



画像4 日韓交換授業&ホームステイの様子

安保法制（戦争法）に関しては、「韓国ではまだまだ知られていない」という結果の一方、「知っている」と回答した人の中では、「日本が戦争を再び始めるきっかけになる」など悲観的な意見が大多数だった半面、「とらえ方によっては、安保法制は2国間にとっても良い法案だ」という意見もあったという。これらは、安保法制（戦争法）成立以降の今後の推移を見極めていく上でも、貴重な調査結果である。

「現在の日韓関係」に関しては、「問題があると考えている人がほとんどで7割以上の方が日韓関係は悪いと回答」し、その原因として一番多くあがったのが「戦時に関する歴史問題の日本側からの正式な謝罪がない」ことで、「歴代総理大臣の靖国神社参拝や、慰安婦問題、竹島問題」などがあげられた。安保法制（戦争法）制定とも時期が重なった点もあり、「安倍総理の韓国への対応を問題視する回答も多かった」という。

日本の国内世論では、たとえば「閣僚の靖国参拝」に関して、「戦没者に慰霊するのは当然」との風潮もある中で、韓国人のそれへの回答に接することで、生徒たちは、「東アジアの中の日本」を客観視し、相対化することが出来た。関連して「日韓関係の改善」に関しては、「多かったのは日本が歴史問題について認め、謝罪をすることだった。今年で70年もたつにもかかわらず日本は正式に謝罪しておらず、そのことを日本ではあまり問題視されていないのではないかと考える。関係改善のためには相互理解を経て、日本はきちんとした形で韓国に謝罪をすることが第一歩になると考える」と生徒たちは分析している。この結果は、2015年末の日韓外相会談での合意以降の両国関係の今後の動向を考える手がかりになるだろう。



画像5 日韓交換授業&ホームステイの様子

安倍総理の姿勢に関しては、「65人中64人が嫌い」と答えた。原因としては過去の過ちを認めない点と、韓国側に謝罪をしない点が多く目立った。日韓の関係を改善するためにはまずは日本国民、また韓国国民にも支持されるような指導者が出てくる必要があるのではないかと考える」と生徒たちは分析をしている。18才の高校生が主権者になった現在、極めて貴重な分析ではないかと考えている。

今回の聞き取りでは、「現状」に関してだけでなく、未来志向の認識を築くために、「平和」の概念に関しても調査した。その結果、「平和な世界はない」と回答した方も複数いた反面、「一番多かった回答は戦争のない社会だ。第二次世界大戦を経験した人が少なくなってきた中戦争による多大な被害を考え直す大切さを感じた。また敵意を持たないという回答もあり、敵意から生まれた世界大戦や今も行われている紛争を考えると、敵意を持たないことが人類にとり、今一番重要」と生徒は分析をしている。「平和」の概念に関しては、「暴力の無い状態」とされてきているが、「敵意を持たない」市民としての民主的主権者の育成も求

められていることが分かった。

(3)－2 民主的主権者としての意思表示と行動の必要性～日韓交換授業とその後の議論から

日本の教育関連法体系では、「平和で民主的な社会」の建設のために、「良識ある公民たるに必要な政治的教養」が本来は求められている。しかし、いわゆる「中立性」の確保も強調されているため、受験体制とも関わり、日本の学校での政治教育は充分ではない。また、「教師は政治的な主義や主張を避けるべき」との論調も見られる。また、「中立性」を意識するあまりに観念的な「両論併記論」（それ自体は重要だが）に基づく「中立」的な政治教育が散見される。そのような「教育空間」に支配されている日本の教育現場とは異なる風土（その是非は別にして）にある韓国の教育現場は、ある意味で刺激的である。

「自分の政治的な信念を持たない（持っていない）日本の生徒」に対して、明確に政治的な意思表示をする韓国の生徒の姿は、対照的だ。東アジア青少年歴史体験キャンプの討論でも毎年、中国と韓国の生徒が主導的な役割を發揮し、日本の生徒は受動的になりがちだ。そのことに関連して、ある生徒は、以下のように述べている。「韓国の生徒はみんな自分の意見を述べられる人が多く、主張もしっかりしていて、また日本人の私たちよりもたくさん歴史を勉強しているなど感じた。そのあとは各グループで意見をまとめて発表した。日本と韓国の生徒の考え方が同じだったので、一緒にどうすれば関係がよくなるかを考えることができて、とても有意義な時間が過ごせた。ほとんどの韓国生徒は安倍総理が嫌いだったのが驚いたけど、『若者から安倍総理に代わった国民の意見を反映できるような新しい首相を出すことが必要だ』という意見が新鮮で宇治高校の生徒たちは、『なるほど』』、と思った。

多くの韓国の生徒は、日本と韓国が日韓基本条約にとらわれすぎていて日韓の未来を考えられていないという意見が多かった。確かに、昔の出来事を引きずりすぎるのは国交の正常化に良くない。だからと言って過去を知ろうとしないのとは違う。過去を知って謝罪してからこそできる友好関係もあるのではないかと強く感じた。

このように討論などを通して、本校の生徒は韓国の生徒に大きな刺激と新たな認識を得ることが出来た。この韓国の生徒の「若者から安倍総理に代わった国民の意見を反映できるような新しい首相を出すことが必要だ」という発言に触発されたように、本校の生徒は

「戦争と女性の人権博物館」などのフィールドワークを通して以下のように述べている。「私は実際にその時代を生きたことはないけれど、当時を生きた人々の辛さや悲しさがひしひしと伝わってきた。もう二度と私たちは絶対にこのような戦争や侵略を繰り返してはいけないと思った。そのためにも、私たちは自分の国の政治を人任せにはしてはいけないう、また戦争や侵略が繰り返されそうになったときに、『待った』をかけられる国民になろうと思った」と。

昨年の安保法制（戦争法）の審議に関連して、「2015年安保闘争」とも称される「普通の市民が、自分の意思で、政治に関して自分の言葉を率直に述べる」という、いわば日本史上初の市民革命的な動きが起きたことは記憶に新しい。この生徒も、フィールドワークや交換授業、そして聴き取り調査を通して、まさに自分自身の言葉でその思いを述べていることに、未来を見出した思いがある。この言葉に民主的主権者を育成するための手がかりがあるのではないか。また、「過去にとらわれすぎない」との言葉が、日本の植民地支配を受けてきた韓国の高校生から出たことにも大きな意義を見出したい。「未来は青年のもの」との言葉は、時代を超えて普遍的な意味を有する言葉なのである。



画像6 日韓交換授業&ホームステイの様子

(4) 民主的主権者を育成する平和教育の展望

全国の新「有権者」（「主権者」ではない）となる高校生に対して、文科省などによる副読本の配布が求められている。また、文科省の通知で、教師の政治的「中立」性が強調され、「教師が主義や主張を述べることは避けるべき」とされている。当然ながら（？）そこには、高校生に「主権者として政治（政府）に批判的な意思の表明や行動を促す」記述などはない。また、今夏の参議院議員選挙に向けて、憲法「改正」をめざす動きも加速している。高校生を「民主的主権者」と

して尊重し、真に平和な社会の実現のために、自ら考え、意思を表明し、行動する生徒の育成が求められている。

そのためにも、「教室での基礎的な知識の学び」と同時に、教室での学びを越えて、東アジアの青少年たちと、平和と和解と未来志向の交流のための学びと出会いの場が何よりも求められている。日韓外相会談を受けて、「日韓新時代」が強調される動向にも注意を払いながら、真の日韓友好の担い手となる民主的主権者の育成への展望を切り拓く今回の戦後70年企画であった。

なお、「慰安婦」の少女像の隣には、実は空席がある。報道の不充分さもあり、その空席の存在は、多くの日本国民に認知されていない。その空席に「寄り添い、未来を語りかける人が増えること」が、真の友好的な「日韓新時代」の創造につながると確信している。



画像7 慰安婦の「少女像」

(5) おわりに

立命館学園が「平和と民主主義」の教学理念を掲げているからこそ、今回の戦後70年企画が成功した。また、2015年12月に開かれた「戦後70年全国高校生未来集会」の場で、全国ピースリレーに参加した高校生が、「京都に寄った時に、立命館大学の国際平和ミュージアムを見学し、平和とは暴力の無い状態であるということが分かり感動した」と発言していた。学園が掲げている「平和と民主主義」の教学理念は、現在の情勢を踏まえると、いっそうその重要性や実践の意義を再確認すべき時が来ている。立命館学園が「平和と民主主義」を教学理念とすることの責務も共有し、真の平和な社会を実現する民主的主権者の育成への展望を切り拓きたい。我々は、ささやかにでも平和な社会をめざすための種をまき続けるしかない。風雪や嵐にも耐えながら、光も浴びてその種が根をはり、芽を出し、花が咲きつつあることも、全学の構成員や平和教育の

前進のために奮闘するみなさんと共有したい。

（立命館宇治 森口等）

4 今後の課題

平和への願い、そして戦後70年への取り組みの意義は、第一に「平和と民主主義」を教学の柱とする学園で、立命館附属校あげてこの課題に取り組んだことにある。宣言文やロゴマークの共有だけでなく、そこで考えた今、世界や日本の平和をどう見るのか、過去の戦争の歴史を風化させずに継承するとは何かが語られていった。

第二に、この宣言文を作り上げた附属校生徒たちの横のつながりが実現したことである。4附属校に発展してきた学園において、横のつながりはまだ不十分であった。このような取り組みで築かれた附属校のネットワークを生かして行くことが大切で、すべての附属校を繋いだネットワークは、現在この取り組みしかない。生徒は学び、語り、自分と違う他者の意見に耳を傾け、平和についての洞察を深め、附属校全体にその理念が伝えられた。

さらに、グローバルに展開する世界の要請に応じて、教育を発展させる必要がある。その中核に、「平和と民主主義」の価値をおく立命館において、重要な課題に取り組まなろう。それは、戦後70年を附属校生徒がどうとらえて、学び、語り、行動してゆくかである。

戦後70年の知見を踏まえて改めて、日本国憲法の中で築かれてきた日本の平和、一方で、世界の平和への連帯の不十分さを考えなくてはならない転機に、私たちは追い込まれている。なぜなら、テロと戦争を人類は乗り越えられていないからである。日本国憲法の70年間の成果を確認しつつ、現実の平和を生み出す立命館人の育成に、この取り組みは、発展してゆくことが求められている。その中で、法学部の役割は大きい。吉田総長をはじめ、平和を戦後語り実践された末川博を抱いて来た我が立命館の社会的責務は重いと言える。

（立命館宇治 杉浦真理）